

教員採用試験対策の取組 —本学教職学生のアンケートから—

田中 正一

1 はじめに

教員採用試験に合格することは、教員を志望する教職学生にとって最大の目標である。それを支援をする本学の教職センター及び学科の教員は、教職学生が教員採用試験に合格することに大きな期待を持つ。

本学教職課程の教育課程認定以来、教員免許状を取得して本学卒業の多くの教員が学校現場で活躍されている。現在の認定されている教員免許状は、中学校・高等学校の「理科」・「数学」、及び中学校の「社会」・「技術」と高等学校の「地理・歴史」・「公民」・「情報」である。さらに2019年度から、再課程認定により、時代の進展に沿った教育課程による教員養成が始まる。今後も教職学生が教員免許状を取得し、有能な教員として歩まれることを期待するのだが、その前に教員採用試験という大きな関門がある。その採用試験における教職センターの取組について以下に述べる。

2 教員採用試験の取組

(1) 平成25年度から30年度までの取組

平成25年度以前から41ページの表3にあるように、現在の秋期教員採用試験対策講座が実施されており、本学の受験対策の実質的なスタートである。平成25年度に冬期教員採用試験対策講座を導入し、公開模擬試験、教育委員会による教員採用試験の説明、合格者の体験発表を設定した。また、中学校教員採用試験では面接が重視されるため、平成26年度は教育実習に出る前に模擬面接会を導入した。面接会では教員採用試験の面接試験官を経験された学校現場の4名の元校長先生にお出でいただき、個人面接及び集団面接の練習をした。さらに平成27年度4月中旬に春期教員採用試験対策講座を導入し、教育実習前に基礎的な試験内容について確認をした。(この年に初めて現役合格者が出る。「中学校理科」大学推薦)平成28年度には2・3月期対策講座を導入し、基礎力の実力アップを目指し、学生が主

体的に勉強できる勉強会を設定した。同年からこれまでの2次試験対策を整備し、2次試験受験者を中心に夏季休業期間中を含め試験終了時まで直前対策講座として支援に当たった。特に夏季休業中の勉強会は最終的に実力を上げることができる重要な仕上げ段階である。

平成29年度には1次試験直前対策講座として、模擬試験及び諸注意を行った。(この年に中学校「理科」で大学推薦による現役合格者がでる。)さらに平成30年度はこれまでの対策講座に多くの学生が参加できるようになった。その結果平成30年度受験対策(平成31年度教員採用試験)の結果、3名の現役学生が合格することができた。(中学校「理科」2名(1名大学推薦),「技術・家庭科」(技術・大学推薦)1名)

(2) 現役合格の期待

平成25年当時、教職課程では現役合格者が現れないことに大きなプレッシャーがあった。特に中学校は面接に重点が置かれることでその支援に当たることが、惜しくも今一步のところであった。そのため、平成26年度から模擬面接会を新たに設けて、外部から協力を得ることにより様々な角度から支援をすることができた。平成27年度に、埼玉県から中学校「理科」の大学推薦枠1名を頂いたので、学科の先生と相談して推薦した。2次試験直前まで面接指導を重点的に実施し、初の現役合格者を出すことができた。翌年もその流れで進める予定であったが、期待された受験生の進路が教員採用試験のみでなかったため実力を発揮することができなかった。教職担当としても大変つらい思いであった。その反省もあって、平成29年度の対策は教員採用試験のみを志している学生をピックアップして指導した。その甲斐もあってか、再び現役合格を果たすことができた。この段階で、本学学生に対する教員採用試験対策の方法が見えてきた。平成30年度の対策は、これまでの対策講座の積み上げた実績をフルに活用することによって、3名の現役合格者を出すことができた。特に今回は、大学推薦による合格者だけでなく、1次試験からのチャレンジによる2次試験合格ができることに大きな期待をかけた。見事平成31年度埼玉県教員採用試験(受験は平成30年7月)中学校「理科」に1名1次試験を経た合格者を輩出することができた。次年度も複数合格を目指していきたい。

(3) 平成30年度対策講座と採用試験

平成31年度埼玉県教員採用試験（受験は平成30年7月）の状況について、埼玉県教育委員会のデータからいくつかの状況及び対策が見えてきた。

1) 教員採用試験受験状況

埼玉県の平成31年度教員採用試験における中学校等教員採用試験受験者は2,139人で、平均年齢は26.7歳、そのうちの新規学卒者の割合は29.0%であった。受験者全体の倍率は6.2倍であり、そのうち新規学卒者の合格率は40.5%であった。高等学校の新規学卒者の受験者は36.1%であり、受験者全体の倍率は5.5倍で、そのうち新規学卒者の合格率は37.7%である。中学校及び高等学校の科目別状況の詳細を埼玉県がまとめた下記の表1、表2で示す。

表1 中学校等教員 教科（科目）別 結果（（ ）内は平成30年度）

教科	1次受験者数	1次合格者数	最終合格者数	倍率
社 会	370 (425)	78 (117)	42 (53)	8.8 (8.0)
数 学	292 (330)	109 (120)	43 (65)	6.8 (5.1)
理 科	248 (255)	79 (100)	42 (50)	5.9 (5.1)
技 術	37 (35)	27 (30)	13 (16)	2.8 (2.2)
全科合計	2,139 (2,331)	706 (883)	343 (440)	6.2 (5.3)

表2 高等学校等教員 教科（科目）別 結果（（ ）内は平成30年度）

教科	1次受験者数	1次合格者数	最終合格者数	倍率
地理歴史	207 (250)	56 (60)	29 (31)	7.1 (8.1)
公 民	87 (101)	32 (28)	16 (14)	5.4 (7.2)
数 学	237 (259)	71 (68)	34 (35)	7.0 (7.4)
理 科	208 (242)	66 (80)	33 (40)	6.3 (6.1)
工 業	28 (38)	17 (32)	4 (13)	7.0 (2.9)
情 報	28 (23)	11 (10)	4 (4)	7.0 (5.8)
全科合計	1,767 (1,972)	694 (744)	321 (349)	5.5 (5.7)

中学校の受験状況結果では、全教科の受験者数が減少し、受験倍率が昨年度に比べ高まっている。また、全科目合計の合格者数は100人も減少している。この状況は少子化や団塊世代の教員退職が一段落したなどが影響しているとみられる。

2) 大学推薦特別選考

埼玉県の大学推薦特別選考における本学の推薦枠は中学校「理科」1名、「技術・家庭科」(技術) 1名である。中学校全体では、大学推薦による受験者数40名のところ合格者は24名で合格率は60.0%である。大学推薦だからと言って必ず合格するわけではない。そのため、学生によっては推薦されると合格が当たり前と思われるようであるが、やはり教員採用試験対策での面接練習は勿論のこと、集団討論、実技、小論を十分に学ぶことが大切である。本学にはないが高等学校の推薦枠の合格率は53.8%であった。

3) 教員採用試験対策講座

平成31年度教員採用試験(試験は平成30年7月)の対策は1次試験対策として、前年の秋期対策講座がスタートである。一般・教職教養の概略程度であるが、6回の講座を平日の18時30分から1時間程度実施した。この段階では教員採用試験に興味を持たせるだけではなく、強い志望を持たせることが大切である。しかし、学生のほとんどは受験に対する意識を持つものの、実質的な受験勉強には至っていない。むしろ民間企業の採用試験か教員採用試験かのどちらを受験するかで悩んでいるようである。就活時期の変更等もあり個々の学生の心持は揺れ動いているようだ。

同年12月の初旬の冬期対策講座は、全国公開模擬試験の実施、埼玉県教育委員会による採用試験の説明、昨年度合格者の体験発表を教職課程3年生全員に受けさせた。実はこの段階が本気になって教員志望を決定させるタイムリミットである。さらに2・3月期対策講座で実力アップを目的に合格ラインに近づけ、4月以降も希望者には過去問題などを課していく。その結果1次試験では埼玉県中学校「理科」で1名、同県高等学校「情報」で1名の合格者が出た。「理科」受験者の自己採点では、合格者の成績は一般・教職教養及び専門教科が70点程度であった。惜しくも不合格となった受験者は、一般・教職教養が75点であったが専門教科が60点以下であったようだ。この点から合格ラインを割り出すことができた。

2次試験対策として以下のことを重点的に進めた。

- ① 個人面接と小論を関係づけてかなりの回数の練習を重ねた。個人差があるものの基礎的な質問程度は全員がクリアできたようだ。場面指導も取り入れ十分な対策に臨んだ。埼玉県では現職教員に不祥事が続いたため、面接試験の評価項目及び着眼点を一部変更し、○経験→倫理観、○指導力→使命感に変更していることも見逃せない。
- ② 中学校における2次試験で注目されるのは昨年度から実施された集団討論試験である。試験の配点は面接200点中120点が集団討論である。そのため、これまで個人面接に重点が置かれていたが高配点の集団討論への対策も重要となった。本学の対策では6回の集団討論の練習を行ってきた。
- ③ 中学校「理科」及び「技術・家庭科」(技術)の実技試験は、理科が50点、技術科が100点の配点である。中学校「理科」では、元中学校教員からの理科実験の指導及び中学校の理科室における実験機器の取り扱いについて指導を頂く。「技術科」においては、中学校技術科教員等から直接の支援及び自主的に6回の実技訓練を行った。

表3 対策講座の年間スケジュール

月	内 容	人
4	教員採用試験説明会 (埼玉県教委)	29
	教員採用試験「模擬面接」	9
	春期対策講座	9
5 - 7	一次試験直前対策講座 「模擬試験」「面接練習」, 「小論対策」	9
平成31年度教員採用試験 (1次試験)		17
8	2次試験直前対策講座 面接練習・小論・実技試験対策等	5
平成31年度教員採用試験 (2次試験)		5
9 - 11	教員採用試験「秋期対策講座」6回	のべ55
12	教員採用試験「冬期講座」	22
	教員採用試験説明会 (埼玉県教委)	18
2 - 3	2・3月期対策講座	のべ30

3 教職課程学生の意識調査結果と分析

毎年度教職課程ガイダンス時に実施している「教職課程意識調査」は、本学の学生がどのように教職を目指しているのか、教職をどの程度理解しているのかなどを調査し、その調査結果から学生の教職に対する意識を分析し、その改善策を検討するものである。(contexture No.31 2013「教職課程登録者の意識と適応：教職課程意識調査」に掲載)

今年度は教員採用試験対策に資することを目的に、新たに4年生全員に教員採用試験についての意識調査を実施した。その内容は、5の資料として「平成31年度教員採用試験受験調査」を添付した。その結果及び分析を以下述べる。

(1) 設問1

平成31年度教員採用試験(受験は平成30年7月)の受験状況の確認である。受験した学生が17名、受験しない学生が13名で、受験率は56%であった。教職課程としては原則受験と学生に示していたのだが、民間企業のみ就職希望や教員採用試験受験意識の低い学生等がいたようだ。今後は100%の受験率を目指してまいりたい。

前述した「教職課程意識調査(平成30年度)」において、現4年生の調査結果では、今年の教員採用試験を受験しますかの設問で「はい」と回答した学生が14人(48%)で実際に受験した学生が17名であることから、年度当初の意識調査結果と実際の受験者数に関連が見られる。そのため4月当初に教員採用試験受験希望者数を増加させる対策を講ずることで受験率を増加させることができる。

さらに、将来教職を目指すかの設問で、「在学中に教員採用試験を受験して合格したい」が4名(13%)であったが、今回の2次試験受験者数と偶然にも同数であった。調査結果としての「在学中の合格希望」を増やすことは1次試験合格者増につながるとことも考えられる。

(2) 設問2

設問1で受験した学生に以下7点についての質問をした。

- 1) 受験した自治体については、表4が示す結果であった。(複数の自治体に受験した者が1名あり。)埼玉県は地元とあって圧倒的な受験者数であるが、近隣の群馬県、東京都、栃木県等への受験者数が少な

い。他県への指導が十分でなかったことが要因であるが、本学学生の埼玉県への志望が強いことも優先しなければならない。しかしながら、近隣の他大学では群馬県、東京都受験もみられるので、今後は群馬県、東京都も加えて受験指導をすることで現役合格率を高めることができると考える。

表4 平成31年度教員採用試験受験者数（単位人）

受験自治体	埼玉県	群馬県	秋田県	山形県	さいたま市
受験者数	14	1	1	1	1

2) 受験結果であるが、結果的に1次試験に合格した学生は2名(埼玉県)で15名が不合格となった。現役学生の合格率は13%である。これまで過去に現役での1次試験合格者が数人しか見られないことを考えると単年度で複数合格者が初めて現れたことになる。しかしながら、15名の不合格者数には課題が残るので、合格率を引き上げる対策が求められる。

また2次試験に合格した学生は、前述したとおり現役学生は3名であった。現役学生の2次試験受験者は4名であったが、惜しくも1名(高校「情報」)が合格するに至らなかった。

本学の既卒者を合わせると埼玉県教員採用試験では今回の試験で7名の合格者を出している。中には昨年度在学中での受験で不合格となったが、非常勤講師等を務めて再度挑戦し本学で初めての中学校数に合格した方もおられる。

3) 不合格者の試験結果の自己採点であるが、報告のあった受験者の平均回答率は、一般・教職教養が50.8%、専門科目54.2%であった。この結果から「一般・教職教養試験」結果が思わしくないようである。実際には報告のない受験生は模擬試験の結果からも推定されるがかなり低い回答率と思われるので、全体的な回答率は40%前後であろう。

4) 不合格者の1次試験のための準備については以下のとおりである。

表5 1次試験準備結果（単位人）

準備結果内容	人数
十分であったと思った。	0
もう少し準備しておく必要があった。	10
あきらめていた。	3

多くの学生が準備不足を挙げている。教員採用試験対策講座は表3のとおり年間を通して勉強会や模擬試験を実施しているが、なかなか本気になって受験勉強をスタートできないでいる学生が多くいる。そのため、3年前から2・3月期教員採用試験対策講座を実施し、実力アップ講座として主体的な学びになるよう支援をしている。昨年の2・3月期教員採用試験対策講座では、10名を超える学生が参加したが、3日間ほぼ全員が出席し、主体的な勉強会に近づけることができた。この時の印象として、グループ全体がかなり熱っぽい雰囲気の中で学習していた記憶がある。

- 5) 前問での準備内容に対して、「十分であったと思った」、「もう少し準備しておく必要があった」と回答した学生に、準備にどのような点が必要と考えるかの設問では、

表6 教員採用試験の準備に必要な点の回答

○試験に向けた勉強，一般教養と専門科目が不足である。（複数）
○1・2年の段階から勉強する必要がある。
○教養試験は過去問と全体のまとめが必要である。
○苦手な問題の演習，問題の反復が必要である。
○大学の講義での理解不足と教採を始める時期が遅い。
○教師になるための気持ちが必要である。

と答えている。支援している立場から見ると、教養試験の受験勉強の仕方がわからないか、十分ではないことが目に付く。以前から想像

していたとおり、そのことが原因として受験勉強のスタートが遅れる理由の一つとなっていることが明確になった。専門科目についても十分な自信を持っている学生が少ない。これらのことに2・3月期教員採用試験対策講座で十分に対応することが求められる。

6) 「あきらめていた」と答えた人になぜあきらめたのかの設問では、

表7 「あきらめていた」理由の回答

○大学院進学のため勉強の不足となった。

○現役合格を目指していなかった。

○教育実習を終えて自分の将来を見直したから。

過去の受験結果からみると、大学院進学のための受験勉強と教員採用試験の準備が重なることもあり、その両立による受験は難しいようだ。大学院に進学してからの受験のほうが可能性が高いのではないか。また、埼玉県では大学院生の受験を推奨しているようであるので、今後大学院生の受験体制についても学科と連携して進める必要があると考える。「教育実習を終えて自分の将来を見直した。」の理由は、それはそれで正しい判断ではないだろうか。

7) 1次試験に合格した学生は2名とも埼玉県であった。その合格した科目は、中学校「理科」1名、高等学校「情報」1名であった。2次試験の自己採点は、中学校「理科」では70%程度で合格、高等学校「情報」では50%程度で、集団討論、集団面接(高校)、専門(高校)で得点を伸ばすことができなかったようだ。この点についても対策講座で具体的に対応したい。

(3) 設問6

本学の教員採用試験対策についての要望を以下に挙げる。

表8 教員採用試験対策についての要望内容

-
- 教職教員の熱心な対応に感謝する。
-
- 早期から教採に関心を持つために授業に過去問を取り入れる。
-
- 4年生の教育実習を終えた後の授業を見学する機会があると勉強になる。後期の「教職実践演習」と重なり難しいと思うが。
-
- 「技術」に関して引き続き実技に力を入れていただきたい。
-
- 教採対策をする時は必ず強制的に出席させる。
-

本学の教員採用試験対策講座については、教職学生から熱心な対応に感謝する記述もあり、多くの機会を設けていることにある程度満足していると思われる。また教職学生は、教員採用試験に向けて地道に努力しているが、積極的に対策講座に参加できる仕組みも求めていることが伺われる。そのことを念頭に、次年度以降の対策講座の改善充実が求められよう。

4 まとめ

本学の教員採用試験対策講座について、前述した本年度当初の「教職課程意識調査」で、教員採用試験対策講座の実施について知っているかという設問では、28人（96%）が知っていると答えている。しかし、対策講座に参加するかという設問では参加するが7人（24%）、今後参加を考えるが14名（48%）であった。対策講座は学生に周知しているが積極的な参加率は低い。参加率を上げるために「強制して参加させる」ことも考えられるが、主体的な学習こそが教員採用試験に求められるのであり、本人が本気にならない限り合格は難しい。

設問6にあるように教職学生が対策講座に参加しやすい雰囲気づくりが今後の改善点となることが確認できた。参加しやすい雰囲気づくりには、教職課程での基礎的な学びとともに、教職への使命、実践的な学び等を充実させることが必要である。そのため、「学校インターンシップ」を導入することは、個々の学生がこれらの学びを理解するチャンスである。本学でも本年度に少数の学生対応であるが、試行として「学校インターンシップ」を導入した。2・3年生での学校現場の体験は教職の意識を高めることができるとともに、教員採用試験への意識も上がり、対策講座の参加率を高めることができると考える。

設問3 あなたは次年度以降に教員採用試験を受験しますか。

- ① はい ② いいえ

設問4 設問3で「①はい」と答えた人に聞きます。

(1) 私は次年度以降に_____ (都・府・県・市・私学) を受験します。

(2) その理由は何ですか。

- ① 必ず教員になりたい。
② 必ずではないが受験したい。
③ 数年後に受験することを考えている。

設問5 設問3で「②いいえ」と答えた人に聞きます。

(1) あなたの進路は教員以外に決まっていますか。

- ① はい ② いいえ

(2) (1)で「①はい」と答えた人に聞きます。

- ① 進路は民間企業に内定しています。
② 進路は民間企業以外 () に決まっています。

設問6 本学の教員採用試験対策についての要望を以下に記述してください。

埼玉工業大学教職センター